

インタビュー

岩谷産業が手掛ける
ヘリウム事業岩谷産業株式会社
産業ガス・機械事業本部 ヘリウムガス部長おかもと
岡本
みねはる
峰春

「ズームアップ」欄は、「働く人と仕事」をテーマに商社各社のビジネスや人材をご紹介します。今回は、商社の資源ビジネスが注目される中、産業において重要な資源の一つ「ヘリウム」を扱っている、岩谷産業のヘリウムガス部長 岡本峰春氏にお話を伺いました。

1. 入社から現在の仕事に至るまで

当社には1991年に入社し、初めに神戸支店に配属となりました。神戸地区には鉄鋼、重工業化学などさまざまな産業が集積しており、その顧客対応に従事してきました。2001-08年には中部支社で自動車関係の業務に従事し、その後、2008-12年にシンガポールに駐在いたしました。帰国後、現在の部署に赴任し、ヘリウム事業を担当しています。

2. ヘリウムとは

ヘリウム（元素記号He）は、沸点がセ氏マイナス269度と全元素の中で最も低いことで知られるガスで、不活性であるとともに、熱伝導率が高いことから、その特性を活かして、医療用の核磁気共鳴画像（MRI）装置の他、半導体、光ファイバー等の生産、身近なところでは、軽い気体であるため、風船を揚げるガスとしても用いられます。現在、製造業の成長が見られる中国、アジア地域で需要が拡大しており、2000-07年の間に、環太平洋地域の需要は2倍に膨らみ、ヘリウム価格も恒常的に上昇傾向にあります。

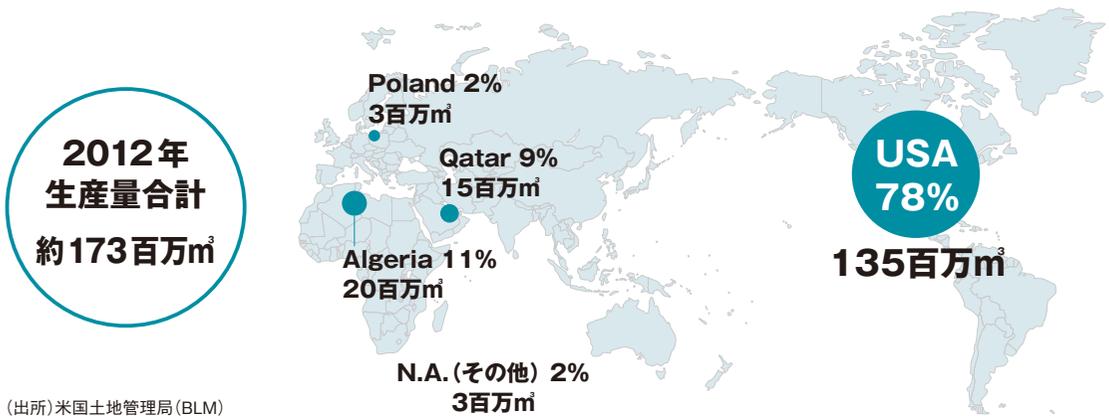
3. 岩谷産業とヘリウム事業

当社におけるヘリウム事業は1980年代にまでさかのぼります。当時はヘリウムガスを充てんしたシリンダーの販売を行っていました。転機となったのは、米国製のコンテナを購入し、自社でヘリウムの輸入・販売を手掛けるようになってからです。液化ヘリウムを輸入するためのコンテナは、セ氏マイナス269度の低温状態で断熱・密閉する特殊な仕様が必要になりますが、自社コンテナ導入という大きな決断により、



ヘリウム専用コンテナ

図 世界のヘリウム生産量



本格的なヘリウム事業への参入を開始しました。現在、全国に「ヘリウムセンター」を設け、国内各地への供給体制を整えています。

4. ヘリウム生産の課題

記憶に新しいかもしれませんが、2012年、米国でのヘリウム生産量の減少等により、国内でもヘリウムの需給が逼迫したことがありました。その際、ヘリウムガスへの関心が一気に高まりましたが、実は、ヘリウムの生産地は米国が約7-8割を占めるため、安定供給のためには他地域からの輸入により、リスク分散させることが重要です。ヘリウムは天然ガス田の副産物として生産されますが、ガス成分の濃度により、ヘリウム生産が可能なガス田に限られます。例えば、南アフリカにも天然ガス田はありますが、成分濃度が低く、ヘリウム生産が難しい状況です。

5. カタールでのヘリウム権益獲得へ

現在、米国以外では、カタール、豪州、アルジェリア、ポーランド等でヘリウムが生産

されていますが、ヘリウムの安定供給をより確かなものにするため、当社は2013年、アジアでは初めて中東のカタールにおいて権益を獲得し、ヘリウムの安定供給に向けた地歩を固めました。今後長年にわたり、年間800万m³のヘリウム取引を開始する予定ですが、これにより、世界のヘリウム販売量の8%を担うことになります。

6. 今後の事業展開への抱負

当社にとって2013年は、カタールでの権益獲得を果たしたエポックメイキングな年となりました。現在、世界でヘリウムを扱うメーカーは当社を含め6社しかなく、非常に限定的なビジネスといえます。今回のカタールでの権益獲得により、本当の意味でヘリウムメーカーの一員となったと自負していますが、今後も安定供給を図るためには、いかに情報を得るか、また、そのネットワークをいかにして構築するかが鍵になります。引き続き、日本国内をはじめとして、アジア・中国等への安定供給に貢献してまいりたいと考えています。

(聞き手：広報グループ 石塚哲也)